



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「經濟科學」の論理について
Author(s)	是永, 純弘
Citation	北海道大學 經濟學研究, 7, 35-53
Issue Date	1954
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31011
Type	departmental bulletin paper
File Information	7_P35-53.pdf



「經濟科學」の論理について

是 永 純 弘

- 一、はしがき
- 二、カウフマンの所説
 - (一) 『論理と經濟科學』の課題と構成
 - (二) カウフマンにおける「精密理論」と「理解的方法」
 - (三) 「精密理論」としての經濟理論と「理解的方法」
- 三、カウフマンの所説に對する論評
- 四、むすび

一、はしがき

一九二五年の「社會科學及び社會政策雜誌」所載のフェリックス・カウフマンの「論文『論理と經濟科學』⁽¹⁾は、「經濟理論の論理的基礎解明」のための一つの試みとして、主觀價值説の側における、就中、L・ミーゼス以後の後期オ

「經濟科學」の論理について 是永

「⁽²⁾ストリア學派」における方法論的見解の基本特質をそなえた、代表的な文献の一つと考えられる。⁽³⁾ けれど、われわれはこの論文において、C・メンガー以來のいわゆる「精密理論」の樹立を經濟學方法論の主要な課題として來た、この學派の方法論的傳統と、現在なお社會科學の領域において、「指導的」な役割をはたしているM・ウェーバー流の「理解社會學」的研究方法、すなわち「理解的方法」との、「綜合」の企圖を見出しうるとともに、客觀價值説にはげしく對立して來たし、又對立しつつある主觀價值説側の、いわゆる「精密理論による經濟科學の基礎付け」なる方法論陣の一據點を識り得るからである。

しかも私見によれば、後期オーストリア學派のかかる方法論的特質に關しては、次の如きその重要性にも拘らず、これについての全面的解明は殆んど見られず、ましてこれに對する、客觀價值説の側からの批判の試みは皆無であるといわねばならない。

本稿は、カウフマンのこの論文について、その方法論的基本特質をあきらかにし、これに若干の論評を試みことを課題とする。

ところで、「精密理論」と「理解的方法」の結合を企圖するこのカウフマンの所説は、多くの、支配的に流行してはいるが、方法論的にその脆弱な基礎が指摘され、又反省されている、いわゆる近代經濟學の理論的陣營強化のために、その方法論に「精密科學」的裝甲をほどこすことによつて、著しく寄與するものと考えられる。けれど、カウフマンの所説における「精密理論」は一方において、「記號論理學による經濟學方法論の武裝」⁽⁴⁾への道を拓き、他方において近代經濟學諸派中支配的地位を保有する「純粹Ⅱ數理經濟學」に對して、一の有力なる援護基地を提供するものと考えられるからである。⁽⁵⁾

かくて、カウフマンの所説は、その主題の抽象性の故に、きわめて多岐にわたる方法論上の諸問題を取りあげ、從

つてその論點も亦多彩であるが、本稿はそのすべてをいちいち詳細に検討するのではなく、これらの諸論點を通じて、カウフマンの所説の最も基本的な特質をなすと考えられる「精密理論」と「理解的方法」との内容を検討するに止め、その他一切の諸問題はこれを他の機會に論究することにした。⁽⁶⁾

以下われわれは次節においてカウフマンの所説を簡単に紹介し、さらに第三節において、これに對する要約的論評を試みる。

- (1) Felix Kaufmann: "Logik und Wirtschaftswissenschaft" - Eine Untersuchung über die Grundlagen der ökonomischen Theorie. (Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, Bd. 54, 1952, SS. 614-656).
 - (2) 本稿において後期オーストリア學派とは、L・ミゼス、G・ヘンペラー、F・V・ハイエク、O・モルゲンシュテルンを主要な理論家とする、凡そ一九一〇年代以後現在迄のウィーン大學を中心とするオーストリア學派であつて、ウィーン學派ともよばれている。「金利生活者の經濟學」の發生地ウィーンにおいて、三〇年代には現代市民哲學の一潮流「論理的實證主義」の自然科学（とくに物理學）への導入が社會科學に迄擴張され初めた。カウフマンにも亦この傾向の影響なしとしない。
 - (3) R. A. Sweezy (cf. "The Interpretation of Subjective Value Theory in the Writings of the Austrian Economists" in Review of Economic Studies, June 1934). によれば、カウフマンはG・ヘンペラーと共に、この派の理論家中「限界効用原理を現實認識の手段とする一群」に算えられ、又G・ヘンペラーはカウフマンのこの論文を「方法的基進文獻」の一つとする。(Vgl. G. Haberler: "Der Sinn der Indexzahlen" 1927, S. 71 f).
 - (4) この傾向を代表する主要文獻として先ず注目しなければならないのはO. Morgenstern: "Logistik und Sozialwissenschaften" (Zeitschrift für Nationalökonomie, 1936, Bd. 7, SS. 1-24)であり、戦後進んでこれを支持した我國の文獻としては、山田雄三『經驗科學としての經濟學』（戦後經濟學の課題）(2)、有斐閣、昭、二二）がまずあげられる。
 - (5) エコノメトリシヤンの一人であるG・ティントナーはカウフマンに依據しつつ「數理經濟學と數學的方法を用いない經濟理論との間に根本的差違はない」と主張する。(cf. G. Tintner: "Econometrics" 1952, p. 7). Vgl. F. Kaufmann: "Methodenlehre der Sozialwissenschaften", Wien, 1936,; O. Morgenstern: a. a. O. S. 7.
- 尚、拙稿「經濟學に於ける數學的方法の意義について」（北海道大學『經濟學研究』第五號）参照。

「經濟科學」の論理について 是永

- (6) カウフマンの方法論的諸研究の成果は、彪大な方法論上の諸問題を取扱つた次の二著に收められている。一は前註にあげた“Methodenlehre der Sozialwissenschaften” Wien, 1936. であり、他は“Methodology of the Social Sciences”, New York, 1944. である。とくに後者は渡米後の彼の見解の變化と、アメリカ經濟學界における方法論的傾向を表明するものと考へられる。

二、カウフマンの所説

(一)『論理と經濟科學』の課題と構成

「この論文は經濟理論の論理的基礎を解明せんとするものである⁽¹⁾」とカウフマンは言う。「論理と經濟學」の課題は、この經濟理論の論理的基礎解明、すなわち、論理的——哲學的諸原理による、經濟理論の基礎究明にあるとされている。

このきわめて一般的且つ抽象的な課題を前にして、カウフマンは先ずその「總論」において、學問論一般から説き起し、順次、「經濟科學」、「精神科學」と問題領域を限定しつつ、夫々の「科學」の理論を構成する主たる諸要素を規定してゆくが、その過程において、概念、範疇、數、法則等々の諸概念を一般的に定義し、「經濟科學」における諸問題の處理のための準備工作を整える。ここで得られた諸成果は次に「各論」において、そのまま「經濟科學」の理論に適用される。これが他ならぬ「經濟理論の論理的基礎づけ」なのである。

さきにわれわれは、「經濟學における數學的方法適用の可能」を論證するにあたつて、カウフマンがとつた論證方式が、「經驗科學」一般における數學的方法適用の可能を論じ、その結果を、「經驗科學の一つとしての經濟學」にも普衍したことを指摘したが、⁽²⁾「經濟理論の論理的基礎解明」という『論理と經濟科學』の課題も亦、抽象的一般論から

出發して、特殊個別的な「經濟科學」の「論理的基礎」を指摘するという、いやむしろ一般的議論の諸成果をそのまま特殊個別的領域に數桁するという、いわば演繹的な論證によつて、はたされたとされていることに注意しなければならない。

換言すれば、カッフマンは「經濟科學」を彼のいわゆる「經驗科學」の一つとして、従つてそれに屬する「精神科學」の一つとして、その「論理的基礎」を指摘せんとするのであつて、「科學論」一般に共通な諸問題、「經驗科學」に共通な諸問題、「精神科學」に共通な諸問題という順序で、先ず「理論」の「精密性」を規定し、次に、この「精密性」に反しない限りにおいて「精神科學」における「理解的方法」の有効性を主張する。ここ迄が「總論」におけるカッフマンの主張の骨格をなすのであるが、そこで得られた諸成果は、「精神科學」の一つ、従つて「經驗科學」の一つとしての「經濟科學」にも全く妥當するものとされているので、次の「各論」においては、「經濟科學」の理論及び方法について、以上の諸成果が、「經濟科學」の對象からの規定、制約をうけることなく、すなわち、特に論證されることなく、反覆、再現されているにすぎない。ただ「各論」は更に數節に分けられてカッフマンの立場を前提にした上での、多くの方法的諸問題の解決、諸對立の解消、等々の彼のいわゆる「方法的純化」の多彩な試みが展開されているが、この場合これらの諸問題は「經濟理論の論理的基礎」解明の課題が既に完遂されたものとして、換言すれば「精密理論」と「理解的方法」とを兼ねそなえた「經濟科學」の方法的「純粹性」を物語る事例として、論議されているにすぎない。従つて、「經濟理論の論理的基礎」解明という、カッフマンの當面の課題は、その「總論」において、すなわち、一般的論述の中に、完了されているとみなさなければならぬ。

一見、構成上の單なる形式の特殊性であるかに見える、このような演繹的推論方式は、實はカッフマンの主張を一貫する彼の思考方式の特質でもある。かかる方式が個別科學の研究方法論における諸問題、たとえば對象と方法との

關係、歸納と演繹との關係、哲學と個別科學との關係、等々に對していかなる解答を歸結せざるを得ないかについてはしばらく問わない。しかし、一般から特殊への演繹的論證方式は、いかに「簡潔且統一的な認識連關の樹立」を企圖するカッフマンの「科學論」に叶つた、従つて「思考の經濟」には適當なものたりえても、それが個別科學の對象の質的規定性、歴史的被制約性を無視して、一般的「論理」の無反省且無批判的な普衍に終始するの危険は免れえないであらう。そしてその限りに於いて、この方式は多くの方法的誤謬を必然的に歸結すると考えられるが、われわれはかく指摘するに止めて、カッフマンの所説の内容に立入ろう。

(二) カッフマンにおける「精密理論」と「理解的方法」

「すべての科學の理論は——と冒頭においてカッフマンは主張する——いかなる概念、いかなる命題(假定)が、特殊な問題の提起と共に與えられているか、或いは、その中に含まれているかの確定をその任務とする。これらの諸概念は、その科學の基本概念(範疇)とよばれるが、それから論理的(最も廣い意味での普遍數學, *mathesis universalis* の意味において)變換及び結合によつて、當面の問題領域についての先驗的認識の總体がえられるが、これはこの科學の形態論 (*Formenlehre*) を規定し、限定する。」ここにいわゆる「基本概念」とその「論理的(普遍數學的)變換・結合」との所産としての「科學の理論」の規定は、先ず第一にカッフマンの全主張の出發點であるとされている。すなわち、彼はこれをすべての「經驗科學の理論」に、従つて、當然「經濟理論」にもあてはまる一般的規定なりとする。

次にこのように一般的に規定された「理論」は、いかにして「精密性」をもちうるか。これに對する解答も既に、「基本概念の設定」とその「論理的(普遍數學的)變換・結合」なる手續の中に用意されている。すなわち、カッフマン

によれば、この「基本概念」そのものは、先驗的、形式的なものであつて、その所産としての「諸概念」、「諸命題」は、あたかも彼が論理學の基本概念としての「眞理性」・「斷判」・「概念」・「數」等を指して、一つの「構成的不變値 (konstitutive Invarianz)」と稱んだごとく、超時間性、超空間性、純形式性、先驗性をもつとされている。

次に、「基本概念」の「論理的 (普遍數學的) 變換・結合」なる手續すなわち、「諸概念」、「諸命題」の形成過程であるが、これまた「基本概念を含む、證明されえない基本命題からあらゆる認識を演繹的に導き出す」ことに他ならず、同様に純形式的、非經驗的な推理の過程であるといわねばならない、けだしカウフマンのいわゆる「論理的 (普遍數學的)」とは、「象徴的記號的思惟」或いは「記號的認識」の所産として、かの數學における、「無限を象徴的記號の領域において把えようとする形式主義」に通ずる認識論に根ざすものと考えられるからである。

かくして、「理論」——以上のごとき「基本概念」とその論理的 (普遍數學的) 變換・結合の結果としての——は今や疑いもなく先驗的、形式的な、彼のいわゆる「理論的認識の問題」に屬するものとして、その非經驗的性格が強調されるに至る。

しかるに「理論」のかかる形式性、非經驗性は、同時に「理論」の「精密性」を保證するものであるとされている。すなわちカウフマンは、以上の如き「理論」の「形式的齊合性」の問題と、「理論」の「經驗的妥當性」の問題との間に鋭い一線を劃し、上述の如く前者を「理論的認識の問題」と呼び、後者すなわち「經驗的認識の問題」から峻別し、「理論」の「精密性」は前者についてのみこれを問題にしうるものとする。換言すれば、カウフマンのいわゆる「理論の精密性」とは上述の如き「理論」の形式性「概念の論理的連關」の「精密性」従つて「理論」の基礎としての「基本概念」の嚴密な設定と、その「論理的 (普遍數學的) 變換・結合」手續の論理的嚴密性に他ならないのであつて、「理論」がいかに合理的に現實を説明するかということとは全く無關係であるといえる。例えば「物理

學的基本概念又はその論理的——數學的諸變容」としての「純物理學的命題」は、それ自体としては（形式としては）「その經驗的妥當範圍とは無關係であり、又その故にこそ絶對精密なものでありうる」と考えられている。それ故「理論の精密性」は「理論」の形式における、又その限りでの論理的齊合性以外の何物でもないといわれるのも決して偶然ではない。

「理論」と、その「精密性」、従つて「精密理論」はカウフマンによつて以上の如く専ら論理的に定式化された。

こうして「經濟理論の論理的基礎」解明なる課題の解決の端初は拓かれたが、實は以上のごとき「精密理論」は證明なしで當然に「經濟理論」にも普衍されるものとされているのであるから、カウフマンの課題は以上で殆んど果されたともいえる。ところで既述のとおり彼はかかる「精密理論」を以下順次に「經驗科學」に、その一つとしての「精神科學」に、又その一つとしての「經濟科學」に普衍して行く。その過程で、「經驗科學の法則をめぐる問題」、「精神科學における理解の方法の問題」が取扱われ、最後に「精密理論としての經濟理論」とそこでの「理解的方法」が論及される。

先ず「經驗科學における法則——彼は『經驗法則』とよぶ——をめぐる問題」について。さきに「理論」をその「形式」と「經驗的妥當性」とに峻別して問題にしたカウフマンはここでも「理論的認識（法則の形式について）」と「經驗的認識（法則の經驗的妥當範圍について）」とを峻別する。その結果は次の通りである。すなわち「ある現象又はその要素の所與が、他の（時間的に後續する）現象又はその要素の所與を規定する」と定義された「經驗法則」（「」内の場合は「因果法則」）は、「例外なくすべての現象に妥當する」という意味での「精密性」をもたない、すなわち「經驗法則は——従つて又「經驗科學」——は絶對に精密なものたりえない」。しかし「理論」の「精密性」と同じ意味での、前述の形式的「精密性」は、「經驗法則」にもそなわつている、いやむしろそなえねばならないと。

ここで「例外なき經驗的妥當性」の意味における「精密性」を放棄斷念した「經驗法則」は「Postulat（要請）」と呼ばれる。（例えば「經濟科學」における「經驗法則」としての限界効用原理はこの「Postulat（要請）」であるとされる。）すなわちカウフマンは「一切の起りうる阻害を排除することによつて、本質的には不精密な經驗法則を精密化する試みは、すべて必然的に Postulat（要請）に轉化せざるを得ない」として、この「要請」の「擔い手」を「型」（例えば厚子模型、理想氣體、ゴシック様式）とよぶ。

これを要するに、カウフマンは「經驗法則」をめぐる問題に對して、「經驗法則」に數學又は論理學におけるごとき「理論」の「精密性」を要求することによつて、「經驗的妥當性」とは無關係な「經驗法則」を「要請」するといふ解決策を施す。ここに、「理論は現實について一言も語らない、そしてその故にこそ理論は精密なものたりうる」という理念との共通性が確認されるわけである。⁽⁹⁾

以上のごときがカウフマンにおける「精密理論」の内容である。

カウフマンは「經驗科學」の一つとしての「經濟科學」に以上の「精密理論」を要求するが、その前に「經濟科學」を「精神科學」の一つとして、後者に「固有な方法＝理解的方法」についての一般的な定式化を行う。

カウフマンによれば、「經驗科學」は分れて、「自然科學」と「精神科學」の二部門をなす。前者に「固有な方法」は「説明的方法」であり、後者のそれは「理解的方法」であるとされている。

「説明」とは「自然現象の因果關係」を對象とし、「現象（自然現象——引用者）を法則連關の中におくことであり、この法則をより一般的な法則系において位置づけることである」と考えられている。

之に對し「理解」は「人間行爲の因果關係」を對象とし、それが「目的の表象と手段の設定との間の因果關係（Motivationsprozess 動機づけの過程）」の如く、「超時間的要素」[Intentionalität「志向性」]とよばれる、意識作用と

意識内容との關係)を含むことによつて、又その限りに於いて、「自然現象の因果關係」から區別されている。

カウフマンは「人間行爲の因果關係」分析をもつて「精神科學」の任務なりとする。従つて「人間行爲の動機理解」はそれに「固有な方法」とみなされる。

ここにいわゆる「理解」の典型として、カウフマンは、「目的合理的行爲の動機理解」すなわち「目的合理的理解」をあげる。すなわち、「目的合理的行爲」は、彼によれば、次の二つの因果關係から成立つてゐる。「手段と目的との因果關係」及び「目的表象と手段設定の因果關係」がそれである。この場合「理解」はこれら二つの因果關係の中、後者すなわち前記の「動機づけ過程」の解明を以つてその特質とする。

「精神科學」の「固有な方法」とされた「理解的方法」については以上のごとき説明が與えられているにすぎない。この限りに於いてもこの「理解」が、M・ウェーバーにおける「説明的理解」と本質的には同等な性格をもつものと考えられ、又ウェーバーが「行爲者自体乃至觀察者からみて態度の有意、意味な『根據』と思われる意味連關Ⅱ動機」の「理解」を社會科學にとつて決定的意義をもつ「方法」なりとした如く、カウフマンはこれを「精神科學の特効劑(Spezifikum)」とみなす。そしてこのことから、カウフマンの主張は、ウェーバー流の「理解」に依據する一群の「理解社會學者」、「理解經濟學者」たちの所説に通ずることがわかる。

しかしここでは、カウフマンのウェーバー及びその信奉者との關連について立入ることよりも、カウフマンにおける「理解的方法」(概念)の特質を、その「精密理論」との關連においてあきらかにしなければならぬ。それは同時に「科學」一般、「經驗科學」、「精神科學」の順に上來論じたカウフマンの所説に對し、一應の要約を與えることにもなるが、その結果は以下の通りである。すなわち、

「理解」は「人間行爲の因果關係」分析に他ならず、又かかるものとして人間行爲についての「因果法則」を定立す

ることが可能であり、従つて又「經驗法則をめぐる問題」についてえられた諸結果がそのまま適用されることになる。「精密理論」と「理解的方法」はこうして互に矛盾することなく、「經驗科學」としての「精神科學」の「理論」を構成する二つの重要な契機たりうるとされる⁽¹⁾。

かくして「經濟科學」の、「精神科學」の一つとしての「經濟科學」の「理論」に、「精密理論」と「理解的方法」なる二つの方法的契機を要求するための準備は完了した。われわれは次に項を改めて、カウフマンの所説の結論に相當する「精密理論としての經濟理論と理解的方法」の内容を訊ねることにする。

(三) 「精密理論」としての經濟理論と「理解的方法」

すべての經濟科學の命題をその特殊化として「論理的」に含む「基本概念」——それはカウフマンにおいては「財貨」と「交換」である。

ここに「財貨」とは單なる物ではなく、「人の物に對する關係」であるとされ、彼はこれを定義して、「處分チャンス (Verfügungschance) ——ある人がある事物を處分しようとして、その處分を可能にする諸條件を充たすことが確率的 (wahrscheinlich) に可能なりと考えられる場合、この人とこの事物との關係」と稱ぶ⁽²⁾。

「交換」は一般にかかる「處分チャンス」としての「財貨」の「交換」であるとされる。それ故唯一人のロビンソンが彈丸を發射し、兎を射止め、薪束を燃して、あぶり肉を得る場合、既に「財貨の交換」が行われたとされる。

「經濟科學」の全命題はかかる「財貨」・「交換」概念の「論理的 (普遍數學的) 變換・結合」の結果とされ、ここに「經濟理論」の基本的部分が打建てられることになる。そして前項における「理論の精密性」はそのまま「經濟理論」の、従つて「財貨」・「交換」概念とその「論理的」變容手續の「精密性」^{II}「形式的精密性」とされること亦言う

迄もない。

同様にして、「經濟科學」の法則としての「經濟法則」についても「法則形式の精密性」がその「經驗的妥當性」と切りはなされ、「經濟法則」はすべて前述の「Postulat (要請)」となる。

カウフマンにおける「經濟理論」の特質の一つは、この「經驗科學における精密性」にある。

次にカウフマンは「財貨の交換」をもつて「人間の經濟行爲」とし、その「動機理解」をもつて「經濟科學」の任務とする。それ故ここで「經濟科學」は「精神科學」の一つとして、すなわち「人間行爲の動機理解」の學として「理解的方法」を重視することになる。

かくして「經濟科學」は一方において「精密理論」を得ると共に、他方において、「理解的方法」に依存することになる。そしてこのことの重要な歸結として、「經濟科學」の全命題、全概念は「慾望、快苦、手段、目的」等の實體的諸要素を含まない、従つて「經濟理論」は「財貨交換の形態論」として、一切の「目的論的乃至價值論的」諸問題を「理論」の核心から追放し、つまり「價值論」(主觀價值説を含めて)を放棄し、「純形式的の經濟行爲論」になるとされる、ということになる。

従つて、例えばカウフマンは限界効用學派に「財貨概念を非實體化した點での功績」をみとめるが、その「限界効用原理」を一定の價值論に基ずく原理とする、換言すればその中に何等かの「認識源」がみとめられるものとする態度に反對し、「限界効用原理」は、「財貨」をその「交換關係」及び「利用可能性の順位」の二面からとりあげて、「財貨の利用意圖」を研究する(理解的方法によつて)ため「Heuristisch (發見的)」に有効な「Postulat (要請)」であると主張する。

こうして「精密理論」と「理解的方法」の上に建てられた「經濟科學」は「論理的に基礎づけられた」わけである

が、これをカウフマンは「絶対形式的普遍數學的・經濟的諸範疇（純經濟的諸概念）の・變換としての經濟形態論（eine ökonomische Formenlehre）の課題」なりとし、「そのために一の有望な目標を示してくれるのは、殆んど原理的・理論的研究に依存する・新しい數學・物理學の進歩である（傍點——引用者）」と結んでいる。

(1) F. Kaufmann: "Logik und Wirtschaftswissenschaft", S. 614.

(2) 前掲拙稿、一五九—一六二ページ。

(3) この特質を明白に示すものに既掲の二つの方法論（前節註六）の他に、F. Kaufmann: "Logik und Rechtswissenschaft", Tübingen, 1922. があり、ここで彼は同様な方式での「法律學の論理的基礎付け」を試みている。

(4) 前掲拙稿、一六〇—一六五ページ。

(5) F. Kaufmann: "Logik usw.", SS. 614~5.

(6) Vgl. Ditto: "Methodenlehre usw", S. 38.

(7) 下村寅太郎『無限論の形式と構造』昭二十、一七六ページ以下、特に一九九ページ。

大瀧武『ライプニッツにおける數學と哲學の關係』（早大、『學術研究』第一號）。

(8) この見解は「論理的實証主義」者たちの常識である。

Vgl. Hans Hahn: "Logik, Mathematik und Naturerkennen" Wien, 1933 (Einheitswissenschaft).

(9) 山田雄三、前掲論文、二〇—二二ページ

(10) Max Weber: Wirtschaft und Gesellschaft, GdS. III, I, Halbb, 3 Aufl. 1947 SS. 3~4.

青山秀夫『マックス・ウェーバーの社會理論』昭、二四、二九—三〇ページ。

(11) ここでカウフマンは「説明」による「精神科學」も亦可能なりとし、マルクスの唯物史觀をその例にあける。

(12) 「處分チャンス」の概念についても亦、ウェーバーにおける「チャンス」、「經濟的チャンス」との一致がみとめられる。とくに注意すべきは、ウェーバーにおける「因果の説明はもはや必然性判斷の形をとり得ず、確率判斷の形をとるが、更に、人間行為に關する場合には、確率が數値として示され得る自然現象の場合と異なり、一般には明瞭なる數值的表現をもち得ない。然しかような判斷の結果をも確率と呼ぶとすればこの客觀的可能性判斷内に於いて表現される確率が、かのウェーバーの所謂チャンス」

「經濟科學」の論理について 是永

(Chance) である(傍點—引用者)との青山氏の指摘である。(青山氏前掲書五四ページ及び七六ページ。)

Vgl. M. Weber: a. a. O. S. 34.

三、カウフマンの所説に對する論評

以上われわれは『論理と經濟科學』におけるカウフマンの所説をきわめて簡単に紹介して來たが、彼の所説の基本特質はその「課題」II「經濟理論の論理的基礎解明」が「經濟理論の精密化」と「理解的方法の採用」によつて達成されようとした點にあるといえよう。すなわちこれを要約すれば、

〔A〕 「經驗科學」としての「經濟科學」の理論は、若干の「基本概念」と、その「論理的(普遍數學的)變換・結合」によつて形成され、しかもそれによつて「經濟理論」は「形式的精密性」を得る。

〔B〕 「精神科學」としての「經濟科學」は「人間の經濟行爲(の動機)の理解」をその任務とするが故に、「理解的方法」を採用しなければならぬ。

〔C〕 〔A〕及び〔B〕の方法的要求は、「經濟理論の論理的基礎解明」の要求として「綜合」され、「經濟科學」は精密理論と理解的方法の上にうちたてられる。

という三點に歸しえよう。以下これらの諸點について簡単な論評を加えることにする。

先ず〔A〕について。

カウフマンは「概念」、「判斷」、「命題」、「數」等の概念を超時間的、超空間的、純形式的な「構成的不變値」として固定化する。「經濟科學」の「基本概念」も亦かかるものとして永久性、絶對性をもたねばならなくなる。しかもそれから出發して行われる「論理的」手續は全く形式的な操作にすぎない。従つて、「經濟科學」の諸概念・諸範疇

は必然的にその内容的規定性を喪失せしめられる。そして、經濟學の對象の質的規定性・歴史的被制約性を全く度外視した、實は對象とは無縁の「諸概念」が、經濟學を「經濟科學」として構成する。その結果は果して、經濟學の理論を、いやすべての理論を、純形式的な概念操作の過程と化し「論理の遊戲」に終始せしむるの危険におとしいれないと保證出來ようか。われわれはすでに物理學において、かかる「精密理論」の構想が「形式物理學、即ち純粹に數學的になつた數學物理學の時代」を招來し、「物質は消滅し、微分方程式だけが残つた」のを識つてゐる。今これを經濟學の領域に「精密理論」の名の下に導入するならばえられるのは一体「物理學的」觀念論の經濟學版以外の何物であらうか？

その證據としてわれわれはカウフマンのいわゆる「精密性」の概念を、とくにその「法則」觀との關連において検討すれば充分である。すなわち彼のいわゆる「法則→要請」轉換は一つの相對主義に、すなわち例外なき妥當性・精密性の要求から一舉に度はすれの相對主義の諦念におちいつた好箇の例であり、これこそ認識の相對性の問題を正しく解決しえない思辨が、不可避免的におちいる絶望的な深淵であらう。

だが、それにも拘らず、彼の「精密理論」なる理念は、一方において、現代市民哲學の一基地としての「論理的實證主義」に連なるといねばならない。けだしわれわれはこの派の「記號論理學的」思维方式の特質としての「數理」論理」觀を、カウフマンのいわゆる「概念」數」の形式性強調と、「普遍數學 (mathesis universalis)」の理念の中にみとめるからである。この傾向を、社會科學にとり入れんとする意識的な、一連の試みは又後期オースリア學派の方法論的特質の一つでもある。

又、他方においてカウフマンの所説は、「純粹」數理經濟學」の方法論と、「經濟科學」の「數學化」の線で同盟する。けだし、「經濟學における數學的方法適用の原理的可能性」をみとめるカウフマンの「數理經濟學」に對す

る「原理的反省」の背後には、以上の如き「數」概念がかくされており、それは容易に「數は絶対形式的な（論理的）概念であつて、數の附與はいかなる領域の事實においても原理的には可能である」という主張と結びつくからである。

次に「B」について。

「人間行爲の動機理解」を「精神科學」の課題として、それをさらに「經濟科學」に普衍するというカUFFマンの議論は、「經驗科學」を方法上の差違から「自然科學」と「精神科學」とに區別するかの如き外見を呈するが、この「方法」の差違は實は對象たる「因果關係」の差違に淵源するとされる。しかし「人間行爲の因果關係」の中に「超時間的要素」をみとめることによつて、カUFFマンは實は「人間行爲の動機」を具體的現實としてではなく、抽象的普遍的な「個」としてとり扱い、個々の具體的な「意識」を「意識」一般において問題にするの餘儀なきに至る。かくして先ず彼のいわゆる「精神科學」の對象は、その歴史性と現實性を剝脱されざるをえない。従つて、「經濟科學」が取扱う「經濟行爲」もまた、抽象的個人としての「經濟主体」に、そのみに關して、専らその「財貨利用意圖」を分析することに局限される。これは明らかにメンガー以來のオーストリア學派の方法論的傳統に連なるものであり、個人主義的社會觀の表明に他ならない。

かくて、「理解」さるべき對象は、多くの具體性、現實性をそなえた「人間行爲」から遠ざけられ、抽象的・純論理的・非歴史的「範疇」又は「定式」としての「基本概念」へと逸れてしまう。生きた人間の行爲や、社會の運動が、ひからびた生命のない「範疇」とおきかえられることになる。

最後に「C」について。

以上二つの要求が、「經濟科學」においてはなして「綜合」されうるであらうか、カUFFマンはこれを肯定するが、

その場合、彼はあくまでも「理論の精密化」を至上命令とし、すなわち「理解」を當然この命令に反しえないものとする。その結果、経済學の對象の具体的現實性を犠牲にすることによつてのみ、換言すれば對象を無内容化し、形式的「範疇」「空虚な概念」と化することによつて、従つて生きた社會の經濟的運動法則を探究すべき、眞の「科學としての經濟學」を、「概念」の純論理的な「形式轉換術」としての「經濟科學」に變質することによつて、はじめて「經濟理論は論理的に基礎付けられる」わけである。

以上要するに、カウフマンの『論理と經濟科學』は、「物理學的」觀念論の經濟學における再版として、すなわち、マツハ主義の經濟學への一案内人として特徴づけられるが、そこにみられる「精密性」の理念は、現在に至る迄後期オーストリア學派の方法論的傾向を如實に物語るものであり、又近代經濟學における一つの有力な見解をなすと考えられる。この誤れる「精密」觀とそれが生み出す多くの難點に對して、われわれは更に詳細な検討を加え徹底的な批判を試みねばならないが、ここではさし當り以上の指摘に止める。

- (1) Abel Ray: "La théorie physique (chez les physiciens contemporains)," Paris, 1937, pp. 228-232.
- (2) F. Kaufmann: "Logik usw" S. 632.
- (3) 「經濟行爲」概念と「個人主義的社會觀」との關連については、「社會は個人間の行爲の多様性である」とするウィーン法理學派の社會學者フリッツ・ザンダーにおつて、ウェーバー流の「理解社會學的」傳統と「方法論的個人主義」の折衷が顯著である。Fritz Sander: "Überwindung der individualistischen Gesellschaftsauffassung," (Archiv für S. w. u. Sp. 1925, 53 Bd. S. 11 ff).
- (4) この意味においてカウフマンの見解はウェーバーのいわゆる「現實的(沒主觀的)」傾向からさえも遠くへだたるものと考えられる。
- (5) 前掲モルゲンシュテルンの他に
K. Menger: "Moral, Wille und Weltgestaltung" (Grundlagen zur Logik der Sitten) Wien 1934 (邦文紹介、『一橋論叢』第三卷第二號、山田欽一「カール・メンガー「道德・意志及び集團形式」參照」。

「經濟科學」の論理について 是永

尙山田雄三前掲論文の他に、「記號論理學の經濟學への導入」を試みたものには

同、覺書「スターリン論文と近代理論の反省」、(季刊『經濟研究』、第四卷第三號)

水谷一雄、「公理經濟學の意義及び其の方法」、『國民經濟雜誌』、第五八卷二〇九ページ以下)がある。

四、むすび

以上、われわれはカウフマンが『論理と經濟科學』において展開した「經濟理論の論理的基礎解明」の試みを吟味して來たが、その結果次の諸點があらかになつた。

カウフマンは「經濟科學」の「理論」に數學及び論理學における如き純論理的、形式的「精密性」を要求し、この要求に適合した精神科學の方法としての「理解的方法」を「經濟科學」の主要方法と考える。そしてこの「精密理論」と「理解的方法」の「綜合」こそ他ならぬ「經濟理論の論理的基礎解明」であるとする。

これに對して、先ず「精密理論」と「理解的方法」とが、彼の論證の限りに於て、「綜合」されたとは速斷しかねるといえるが、より重要なのは「精密理論」自体の意義、「純論理的、形式的精密性」の要求が、經濟學の方法に對してもつ意義であらう。それは經濟學の諸範疇、諸概念と、客觀的事實、歴史的存在としての對象との正しい關係を切斷し、經濟學を形式的論理操作の集合体たらしめることによつて無内容化しつくすことを終局の目標とする。

かくして「精密理論」とは「非科學的理論」の別名であり、従つて「經濟科學」とは客觀價值説が堅持する「科學としての經濟學」に鋭く對立し、「物理學的」觀念論の誤謬を意識的に再現しようとする企圖の代名詞であるといえよう。

われわれは經濟學におけるこのような傾向が、現代の主觀價值説において注目すべき一潮流であり、いわゆる近代

經濟學の方法的根據地たりうることを、次の二者において確認しうる。すなわち一は近代經濟學の方法論的背景としての「論理的實證主義」の信奉者たちであり、他はピタゴラス派的な、「數」のユートピアに固執する「純粹」數理經濟學」の「諸權威」である。

かくして「經濟科學」の「論理」が醸成する多くの混亂を、さらに方法論上の諸問題に即して追究し、もつて以上の傾向の非科學性をあきらかにすることは、われわれにあたえられた方法論上の次の課題の一つである。

了

一九五四年四月二十日